ちいさこべ

山本周五郎

新潮文庫

ちいさこべ

新潮文庫　や-2-25

昭和四十九年五月二十五日　発行
平成　元　年十一月十五日　三十刷

著者　山本周五郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六-五一一一
編集部(〇三)二六六-五四四〇
振替東京四-八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社　製本・有限会社加藤新藤社
© Tôru Shimizu 1974　Printed in Japan

ISBN4-10-113425-1　C0193

新潮文庫

ちいさこべ

山本周五郎著

新潮社版

2188

目次

花筵……七
ちいさこべ……一三三
ちくしょう谷……一九一
へちまの木……二〇七
解説　木村久邇典

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ちいさこべ

花(はな)

筵(むしろ)

一の一

お市は十二三の頃から春さきになると眼を病む癖があった。陸田へ嫁に来てからのおちつかない暮しで今年はつい忘れていたが、お城の桜が咲いて間もなく良人に「眼が赤い」と云われ、鏡を覗いてみると果してまたいつもの病が始まっていた。いったい彼女は眼の性が悪いというのだろうか、少し根をつめて縫物をしたり細かい字の本を読過したりすると、すぐに涙が出てきたり瞼が痙攣したりする。それを構わず続けていると霞でも懸ったようになって、暫く不自由することが珍しくなかった。

「それではもう針を持つのはおやめなさいな」姑の磯女はこう云った、「そうでなくっても身重になると眼にひびくものですからね」

「わたくしのは小さいときからの癖ですもの、それにこの季節さえ越せばしぜんと治ってしまうのですから……」

来てまだ七月という遠慮もあるが、そればかりではなくお市には一種の自信のようなものができていた。陸田の人間になってから月日が楽しく、明け暮れが緩みのないあかるくひき緊った雰囲気に充ちていて、軀も心も伸びのびと息づき始めたように思える。里にいたときに育ちきらずにいたものが、こっちへ来てからにわかに成長を始めたという感じなのだ。それには里の家風が厳し過ぎたこともあるし、五人きょうだいの末のおんなで、必要以上に大事にされたこともある

だろう、ちょっと風邪をひいたくらいでも三四日は寝かされ、見えないほどの棘を刺しても医者が呼ばれるという風だった。元もと余り丈夫なほうではなかったが、そのために自分でも軀に自信がもてず、ごくつまらない故障にも神経を遣うような習慣がついてしまったのである。陸田ではそれとはだいぶ違っていた。良人の信蔵をはじめ姑の磯女も義弟に当る辰弥も久之助も、いったいが暢気なうえに淡白な性質で、めったに物事にこだわるということがない。武家には珍しいくらい明けっ放しで、肩肱を張るような風はどこにもなかった。世間では嫁してゆくと当分は気苦労が絶えないというし、お市にしてもその感じがまったく無かった訳ではないが、それはごく短い日数のことで、家族の気質がわかると同時に世間の例とは逆な、まるで解放されたような安らぎを感じたのであった。ひきやすかった風邪もひかなくなり、手足にも肉が乗ってきたようである。眼の病み癖なども軽く済むに違いない、ごくしぜんにこういう自信がついていたのであった。

磯女は「それならいいけれど、でも無理をなさらないように」と云っただけで強いはしなかった。その夜のことであるが、義弟の久之助がみつけて独りでりきみだした、「お母さんは暢気だからいけません、世間の嫁さんならもう針なんか持たされはしない、あね上だってそうだ、もう細かい仕事なんか抛って、早く医者にみせなくてはいけないでしょう、冗談じゃありません」こんなことを云っていきまいた。

「久之助さんはたいそう精しいのね」磯女は笑いながら三男を見た、「でもあなたの云うのは産後のことでしょう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「へえー、産後ですかね」

いきまいた顔で衒れたように、すばやく兄たちを見る眼もとが可笑しかった。信蔵はにが笑いをして「なにしろ早合点だからな」と云い、辰弥は眼尻の下った円満な顔で頷いていた。こんな些細なことにも三人の気質がよく表われる。信蔵は口数も少ないし総体もの静かで、眼に見えないところに注意のゆき届くという風だ。二男は軀も顔もまるまると肥え、どっしりおちついて、いつも唇のあたりに微笑を湛えている、肥えているためだろうが立ち居も億劫そうだし、口のきき方も暢びりしたものだ。そればかりではなく云うことが突拍子で、つい笑わずにいられないようなことが屢々あった。いつだったろう笹巻なにがしという槍組の友達が亡くなったとき、まだ病んで寝ている積りで見舞いにいったのだが、帰って来てそれを伝えるのにこういうことを云った、「病気はたしかなもんだったそうだけれどもねえ、看病に手を尽したら割あい死んじゃったってさ」これには良人の信蔵も磯女も笑わされてしまった。久之助はこういう場合に決して黙ってはいない、そのときも辰兄さんの話は禅の公案より面白くっていいと囃したてた、「病気はたしかなもんだったなんてちょっと俗ばなれがしているじゃありませんか、なにしろ看病に手を尽したら死んじゃったんだからな、つまり看病なんかしなければ助かったかも知れなかったんだ、なかんずくこの割合に死んじゃったというところなんぞ壮厳なもんですよ」辰弥のほうは尻下りの眼を細くしながら、まるで他人のことでも聞くように黙ってにこにこするだけであった。その翌日のことだったろうか、久之助は出仕しがけに次兄の顔を見て「今日あたり笹巻では割合い葬式をするんじゃないんですか」と云ったが、それから「割合」という言葉がよくみんなの口にの

ぼったものだった。こういう揚げ足取りとせっかちと負け嫌いはいかにも三男坊という感じがよく出ている。口もよくまわるがすることも機敏で、兄弟の中ではいちばん甲斐性者と云われていた。現に次兄が二十四でまだ部屋住なのに彼は二十二で御蔵方へ勤めている、これは収納奉行の古原忠太夫という人にみいだされたのであるが、それから二年あまり経ち、古原が江戸詰の用人として去った後でも、役所の評判はなかなかよかった。お市が嫁して来て始めに馴染んだのも久之助であった。年からいえば彼のほうが四つも上なのだがそんな風は少しもみせず、なんにつけても「あね上――」あね上とよく気をつけてくれる。なにしろ来て十日と経たないうちに部屋へやって来て小遣をねだったくらいだから、こちらの気持もうちとけてゆくのが自然だったろう、その後も十日おきくらいには小遣をねだられるが、お市は母からかなりの額の金を貰って来ているので、いつも笑いながら出してやるのである。

「なんにお遣いなさるの、もし必要なら少しは纏めて差上げても宜しいのよ」

「なにこれで結構です、小遣というやつは少しずつ頂くところに味があるんですからね、いまにわかりますよ」

こんな問答もあって今でもまだ続いている。本当なら彼は役料もはいることだし、まだ部屋住の辰弥こそそのくらいのことはあってよい筈だけれど、これはもう泰然自若たるもので弟のすることを感づくだけの気まわりもない、もちろん良人も磯女も知ってはいなかった。

軽く済むだろうと思っていた眼はやっぱりはかばかしくなく、例年のような経過をとるのだろうか、四五日すると頻りに涙が出はじめたので、いちおう細かい仕事は休むことにし、ながい掛

りつけの石岱さまという眼科へ治療に通い始めた。治療といっても洗って点眼するだけなので、四五たび通った後は下僕に薬を取って来させ、里にいた頃のように自分で刻を定めてやるようにした。眼のほうはそんなことでよかったが、毎日の手持ぶさたにはほとほと困った、娘でいたじぶんにはまるで無頓着だったし、隠れてはずいぶん本なども読み兼ねなかったものだ。けれども嫁の身となればそう引籠ってばかりもいられないし、そうかといって縫物などをしている姑の側でぼんやり眺めているのも具合が悪かった。朝のうち一刻ほどすれば片付けものは済んでしまう、召使がいるから食事のまえあともこれといって手を掛けることもない。時どき姑の部屋へいって茶を淹れながら少しばかり話すのだが、多くは自分の部屋の窓際に坐ってぼんやり庭を眺め暮すのである……こういう身の置き場に困るような退屈をもて余していると、里の奥村から使いがあり母が病気で寝ているから顔を見せて貰いたいと云って来た。正月に訪ねたきりだし折よくいとまの多いのを幸い、磯女の許しを得てすぐゆくことにしたが、見舞いの品を調えたり着てゆく物に迷ったりしているうち午近くになってしまった。

「おくれついでに午を済ませていらっしゃい、これからだとあちらへ御迷惑を掛けるでしょう」

「そんなことはございませんけれど、では頂いてまいりましょう」

磯女とこんなやりとりをしているところへ思いがけなく久之助が下って来た。彼は挨拶の声をかけながら廊下を通り過ぎようとして他処ゆき姿の兄嫁をみつけ、「やあおでかけですか」と立止った。そして里からの使いで母の見舞いにゆくということを聞くと、なにか腑におちないことでもあるように首を傾げ、それからすぐ思い直したという風に、「今日のうちに帰っていらっし

やるんでしょうね」

こう云いながらじっとこちらの眼を見た。もちろんその積りでいたのだが、彼の調子にどこやら念を押すような響きがあったので、お市は咎められでもしたように夕方までには帰ると答えた。

「貴方はどうなすったの」磯女が三男のほうを見て云った、「たいそうお早いようだけれど加減でもお悪いんですか」

「なに午後に同僚の集まりがあるんです、急ぎますからすぐ食事の支度をさせて下さいませんか」久之助はこう云ってゆきかけたが、もういちどお市へ振返ってこんどはごくあたりまえな調子でこう云った、「あちらへおいでになったら皆さんに宜しく、特に弁之助さんには星宿譜の拝見できるのを待兼ねていると伝えて下さい」

「せいしゅくふ……というのでございますか」

「ええそう、東七宿三十二星とか、北七宿五十一星とかいって二十八宿の星座を譜にしたものです、そう云って下さればわかりますよ」

弁之助というのは四番めの兄であるが、そんな事を調べているという話は聞いたことがなかった。然しそのときは妙なことを始めたものだと思っただけで、かくべつ気にも留めず巽御門下の家をでかけた。日のつよい時刻でもあり気温も高く、青傘をさしているのに少し歩くと汗ばむくらいで、早り続きのすっかり埃立った道をゆくのはかなり辛かった。奥村へは大手さきをまわって殆んどお城を半周しなければならない、そういっても大した距離ではないのだが、乾いた道から反射する光が病んでいる眼にしみるので、少しいっては立止って紅絹ぎれで涙を拭いたり眼を

ふさいで休んだりするために、思いのほか時間を取ったし、ゆき着いたときには肌の物をすっかり取替えなければならないほど汗をかいてしまった。

一の二

奥村へ着くとまず小間使のたみに湯をとらせて風呂舎へはいった。たみは顔のしゃくんだ十七になる農家の娘で、気はしの利くことも年に似合わないが、図抜けたお饒舌りの面白さがお市の気にいりだった。黙って聞いていると舌のやすむひまもなく饒舌る、纏まったことを云う訳ではなく唯もうそれからそれへと饒舌ってさえいれば満足だというように……生れて育った村の風俗や行事は幾たび聞いても飽きなかった、なかにはかなりいかがわしい話もあってこちらの顔が赤くなるようなばあいでも、当人にはごくあたりまえなのだろう平気な眼をして話し続けるのである。尤もそれさえ順序や纏まりがある訳ではなく三から一へ戻り五から八へ飛ぶという風で、しまいにはなにがなにやら自分でもわからなくなり、欠伸をしながら居眠りを始めるというのが定っている例であった。

「まあずいぶんお肥りあそばしましてございますね」風呂舎へはいると早速こう云ってたみのお饒舌りが始まった、「おむなぢが見違えるようではございませんか、このまえお流し申しましたときにはおこぶし程もございませんでしたのに、お背もお腰まわりもまあまあ」

「そんなに軀のことを云うものじゃないよたみ、恥ずかしくなるじゃあないの、その湯を半挿へお取りな」

「こんなにお美しくいらしってなにがお恥ずかしいものでございますか、そんなことを仰しゃれば若奥さまなぞはあなたまるでもう……」

加世という長兄の嫁のことから兄たちの動静、家士の誰それに子が生れたこと、「太刀」という飼犬がすっかり老いぼれてしまったこと、酒好きのくせにすぐ酔うので有名ななにがしという客がこのあいだ広縁から転げ落ちて頭に瘤をこしらえたこと、自分に嫁のはなしがあるけれども相手が性なしということを知っているからゆく気はないこと、庭の芙蓉が今年は三本も枯れてしまったこと、更になにに次にこれこれという具合で、汗を流し終り持って来た着替えを着てしまうまでには、正月以来この家にあった事をお市はすっかり知ることができた。耳ががんがんするような気持だったけれど、厳しい家風で自分の他にそんなお饒舌りを聞いてやるような者はない。おそらく溜めに溜めていたのだろうと思うと、可笑しさもてつだって叱る気にはならなかったのである。

母は畳んだ夜具の脇に坐っていた。血色も変らないし病んでいる人のようには見えない、兄嫁の加世がその側で茶や菓子の支度をしていた。

「おやおや、また眼が始まっておいでなのね」母はこちらの見舞いなどよく聞きもせずに眉をひそめた、「あなたのそれは一生の癖になってしまうのじゃないかしら、石岱さまへはいっておいでかえ、ふむ、こちらとはお違いだろうけれど養生をなさらないのでしょう、いつもよりはお悪いようにみえますよ」

細かい仕事などはずっと休んでいるし手持ちぶさたで困るくらいだと云ったが、母は信じ兼ね

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com